幻想の運び屋 改訂Ver

Seven dayS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想の運び屋　改訂Ｖｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ６４８９Ｘ

【作者名】
Ｓｅｖｅｎ　ｄａｙＳ

【あらすじ】
今昔のいつの時代も変わらず、商業の中には必ず物流と言う要があり、それを消費者たちは必ず必要としてきた。（前略）
そして、それは採る者（生産業）がいて、運ぶ者（運送業）がいて運び、売る者（商業）がいて……
買う者（消費者）がいて消費し、成り立つのが商業であるというのも何時の時代も変わらない。（中略）
……これは、そんな運ぶ者に属す

る物流の要。運送と言う名の仕事をする、幻想入りをした男の話である。

『よく分からない？
そりゃあ、しゃあない話さ。
俺がこんなんだからだからな。』

幻想の運び屋の修正版になります。（ちなみに、ここに話が追加されていれば、あちらも改訂されていることになります。）

始まり始まり（前書き）

諸事情により作り直しました。

今作の目標はクオリティーを上げる事……

始まり始まり

やあ、俺は上松光という者だ。
んで、俺はとある時に幻想郷に来てしまった悲しい元高三。

……普通に悲しくないっだろって？

まあ、本心はそんな感じ。　……なのだが
でも、ここは空気を読むべきだろ？

ああ、そう…
そんな配慮は別にいらない。
はい、そうですか。
何かすみませんね。

……え？どのように今までやって来たかって？

何か話が突然ぶっ飛んだな～

分かった、分かった……って、本当に分かったからそんな顔はするなよ…

～～～～～～～

「卒業証書授与。」

あ～あ、また退屈で暇な時間が始まったよ。
まったく、この長さには毎回呆れさせられる……ぜ

「あ～あ……」
卒業証書授与ってさ、自分がもらうまでが長いかそれとも待つのが長くてしんどいよね。
でも、はっきり言えば真ん中でも変わりはしないんだけれども。

「あ～あ……」

よし、決めた……俺は寝る！！
さてと、寝るか

・・・・・・・・

と、言う感じに俺は不謹慎極まりないことをやった訳だ。

んで、「ああっと、信じられな～い。　昼寝？をして起きてみれば知らない所に。（棒読み）」

「で、あんたは誰なの？」

「てか、『知らない天井だ。』と言わせてくれ。」

「……」

「悪い悪い。
で、ここは何処なんだ？」

「私の家だけど。」

「違う違う。　市とか町とか村とか（ｒｙ」

「し？　ちょう？　なにそれ？」

「はあ！？」

「いや、〇〇県〇〇市とか　〇〇町　〇〇村　とか……は？」

「じゃあ、あんたは外来人なんだね。」

「外来人？」

まあ、だいたいこんな感じに俺は幻想入りした訳だ。

……簡略的過ぎるって？
いや、大雑把すぎる？

そんなの俺は知らん！！
それに、いずれに分かるさ。
うん、多分。

「光～！！　仕事は大丈夫なの！？」

あっといけね……

「ああ、今から行くから大丈夫だ！！」

まあ、今日はこのくらいでよろしくお願いしますよ。
俺はこれから仕事があるんでね。

何の仕事をしているのか？

それは簡単に言えば『物流』がキーワード。

まあ、これで分かる…筈。これだけ言えば分かるだろ？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ガラガラ………

倉庫の扉を開けた俺に飛び込んできた光景………は。

「うわっ！！　今日はやたらと多いな…」

俺は倉庫を開けて昨日に受け付けた荷物の量を見て驚いた………うん、びっくら驚いた。
昨日は人がどんどん来るからちょっと調子に乗り過ぎたな〜

……まあ、どっちにしろ生きていく為にはやるっきゃあないんだが。

いや、仕事が面倒臭いとか、しんどいとか……そんな訳じゃないんだぜ？

「よいしょっと！！」

俺はひとつひとつ丁寧に荷物を荷台に乗せていく。
正直、これが一番手が込んでいて一番疲れるが、肝心な物が壊れてしまうとマズイので、まず気は抜けない。

いや、抜きたくても抜けないんだ。
前にも類似した事を言ったが、俺はこれで飯を食って生活させてもらってる。

さらに、仕事と言うものはシビア。
何かのミスをしたら信用を失ったら俺の仕事は終わり。
まあ、どの時代も同じだろうけど……

「これで、最後だな！！」

最後の宅配便を持ち上げると、気合いを入れて持ち上げる。

「よいっしょっと！！」

やはりジジくさいような掛け声を出して最後の荷物を荷台に積んだ。
実のこと、いつもは荷台が三分の一か多くても半分くらいなのにも関わらず、今日は助手席にも荷物があるくらいに多い。

まあ、その分収入がこーゆー時に多いがな。
苦労と収入は比例する。あくまで身体的な苦労なので疲労だが……

「お～い！！　光～！！　」

おっと、何だか呼ばれてるみたいだ。

～少年、移動中……～

俺が店の倉庫の出口までに出て行くと

「この荷物を夕方頃迄に届けてほしいんだが……」

いつも、いろいろな面でお世話になっている酒屋のおじさんが居た。

「ああ、別に夕方頃迄なら大丈夫ですよ。」

まあ、おそらくどんなに運ぶ荷物が多くても、絶対に夕方頃なら間に合う筈だ……おそらく。

それに、おじさんにはいつもお世話になっているからな～
それを考えれば簡単には断れないし。

「ああ、頼むよ。」

「行き先は？」

「ああ、例の銭（ｒｙ」

長いので、省略させてもらう。
滞納してるのは分かったから。
俺には愚痴らないで……くれ。

「で、このビール１０ケースと日本酒が三十本。
そして、請求書を運べば良いんだな？」

「ああ、頼んだよ。荷物は店に取りに来てくれ。」

と、言うとおじさんは走って帰ってしまった。
まあ、気にする事でもないか。

あの人も自分の仕事があるし……な。

というか、この酒の量は多すぎないか？

宴会をやってるとしても一回に頼む量が……まあ、もうどうでもいいか。

そして、俺は荷物を運ぶのにいつも使っている軽トラへ乗り込むとエンジンキーを挿してキーを回し、エンジンを掛けた。

ブロロロ

うん、大丈夫だな。

そして、荷物を運ぶ場所の一覧表を見て確認すると………

「さてと、時間もそんなにないし………行きますか！！」

俺は軽トラのアクセルを強く踏んでエンジンを回し、車を勢い良く発進させた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

さて、これから俺はこの幻想的な世界でどんなことを経験し、そして最期に何を見て何を思うんだろうか？

まあ、随分と臭いかありきたりな台詞だが………

お得意様と思いふけた俺（前書き）

ストーリーが修正前とは変わりそうな予感が……

お得意様と思いふけた俺

さて、今日に運ぶ場所、配達先は人里の○○さんと○○さん。（ｒｙ
そして、こーりんと滞納者だな……
（ちなみに、滞納者と言うのは博麗霊夢のことだ。）

こーりんはガソリンを買ったりしたりしてるから良いが、あの、巫女はな……
まあ、本人の前では殺され兼ねないから言えないけど。
いろいろとあるし、ヤバいんだ。

言いたいことはたくさんあるさ。
でも、理不尽な事に力の差は歴然。
さらに俺はスペルカードを持たない……いや、諸事情的に持ちたくはない。

まあ、戦えないその時点で何も言えない訳だ。いわゆる…無条件で戦いを挑まれ、そのままの圧倒的なる実力差で叩き潰されるという理不尽さ極まりない出来事を避けるためにな。

キキキッ！！

おっと、そういえば……あのお得意様を忘れてたな。
あそこはちゃんとやっとかないと行けないんだ。

何故かって？

そんな事は行けば分かる。

通常なら縁も無いような大きさの屋敷の前に車を停止させると、荷台から荷物を取り出して鍵を閉める。

そして、門の前で止まって溜め息を一度つくと、「すみませ～ん、宅配便で～す！！」と、叫び声とはいえないもののそれに比例するような声を俺は発した。

～～～～～～

俺が運送業を始めたのは数ヶ月前。
きっかけとかは今言うことじゃないが、営業当初は車、自動車自体が珍しく……いや、いろいろな理由でうけなかった。（自動車自体が走っていなかった為だろうが。）

まあ、いろいろだ。いろいろな理由があるから突っ込まないでくれ。
頼む。

で、ここからが本題だ。

……ある時からその受けなさが変わったんだよ。
ある時から……な。きっかけとかは今言うことじゃないが……
一番最初、営業当初は車、自動車自体が珍しく……いや、いろいろな理由でうけなかった……まあ、いろいろだ。いろいろな理由があるから突っ込まないでくれ……頼む。

で、ここからが本題だ。

……ある時からそれは変わったんだよ。
ある時から……ね。

確か、それは俺が運送業を始めてから何週間かたった日の朝方だった……っけかな？

いらない？

いや、今日は何となく話したいから話させろ。

～～～

とある日の朝方…

「あ～あ……」

今は朝の5時……

俺は今日も少ない荷物の為に早く起きている。

やっぱし……眠い。

そして、今日も軽トラと運ぶ荷物が置いてある倉庫へ行く。

眠いな…

ガラッ

俺は家から倉庫に繋がる扉を開けて倉庫の中に入ると、今日の配達

物が置かれている場所へと向かって歩き出す。
そして、俺が愛用する軽トラの横を……「……って、えっ！？」
何故、突然俺が何に驚いたかって？
それはな……

「……」

静かに軽トラの前でしゃがみ、凄く真剣に軽トラを観察？をしている少女がいるんだよ。何故だ？

まあ、観察をしてる時点で強盗じゃないし、別に何か物を壊しに来た訳じゃない。多分。

しかし、な、何か何だか気味が悪いんだよ。

俺は普通に音を発ててこの中に入って来たし、歩く時も足音がしたはず……
それに、鍵は閉めてるのに一体何処から入った？
強盗ではなく、壊しに来た奴でも無い。
一体全体どうなってる？
まあ、俺はこう自問自答をし、考えながら数分間少女が動かないか待つことにした。
〜〜〜〜
が、数分たっても「……」全く少女は軽トラのそばから

動かない。
いや、動こうとしないのか？
じっと軽トラの周りを移動しながら観察している……
さらに、まだ俺という人物の存在に気がついていない。

これは、どうしたものか？

気は進まないけども、しょうがないかなぁ。

俺は、そう思うと背後から音をなるべくたてずに近寄る。
そして、
トントン……

少女の肩を軽く叩いた。
すると、

ビクゥッ！！！

跳び上がるように背筋を伸ばし、固まってしまった。
で、何だか見たくない現実がすぐそばにあるらしく、ゆっくりとこちらを向きはじめる。

それはまるで、漫画やアニメのよう……だ。

「……」こちらを完全に向いた少女は真っ青になった。

えっ？
何で？

「お～い……」

顔の目の前で手を振っても、頬を指で突いても何も反応しない……
……いや、別にやましい事など考えてもいないし、してもいない。

しかし、何故？

てか、頬が気持ちいいな。

まあ、これ以上待っても拉致があかなそうだから、作業を続けるか、
それとも少女が復活するのを待つか……どうする？

一瞬考えた俺だが、
まあ、当然のこと

『……よし、作業するか！！』

となり、結局俺が最初に折れた。
俺は立ち上がって荷物を置いてある場所へ行き、荷台に運び出す作業を始める。

暫く時間が経ち、残りの積み込む荷物も少なくなって来た頃。

あの頬さわり心地が良かった少女は……「あの～……」つ
いに、声をかけて来た。

「うん？　何？」

対応の仕方は迷ったが？
とりあえず、恐怖心を与えないように……いや、誤解を与えないように笑って返事を返す。

「えっと、その……　ごめんなさい！！」

が、返ってきた返事は正反対。
……笑顔が誤解されたのか？

「い、いや……大丈夫だよ。」

「ほ、本当にごめんなさい！！」

「だ、だから大丈夫だって……」
一応、謝られるのは予想の内だったけれども…こんなに謝られると、何だかかなりひょうし抜けするな…

まあ、そんな彼女は彼女で俺に対して謝らなければ気が済まないだろうなんだろうけれど。

「で、その、もしよかったら……」

え？
突然、どうした。
……一体何だ？

「……」

「あれに乗せてくれませんか？」

「うおあ！！」

ドテッ！！！

「大丈夫ですか！？」

「あ、ああ……」

流石に初対面の人に期待をした俺が馬鹿だったな……うん。

いや、別に変なやましいような事を考えてた訳じゃあないよ……

ホントだよ？

「別に良いさ。　運ぶ荷物もそんなにないし。」

「あ、ありがとうございます！！」

まあ、良い暇つぶしになりそうだから良いさ。

〜〜〜〜〜〜〜〜

……まあ、そんな感じに宅配に乗せて行ったら。

「また、乗せてくださいね！！」

と、目を輝かせて言ってきた……何か、災難？

で、この出会い、俺の上手く行くようになったきっかけだな。
いわゆる『口コミ』がその時から広がったらしい。
話が分からない？
そりゃ、俺もわからないから仕方ないさ。
ただ単に俺は話したかっただけだからな。
少しだけ思い出して考えふけっていた俺。
しかし、時は止まらない。
そんな俺にたいして目の前にある門が迫ってきた……いや、開けたから迫ってきたんだがな。

「おっと、危ない……だから突然門を開けるなって。」
「今日も来てくれたんですね！！」
「ああ、そうだな……荷物を運びに来た意味でな。」

「そんなに荷物が多い訳ないじゃないですか。そんな嘘を並べて私を振り切れると思ったのですか？」

彼女は何にも自分の考えが間違っていないような勝ち誇った笑みを俺に見せ、まだ発展途上で無いような胸を強調させてしまっている事にも気がつかずに胸を張。

そして、嬉しそうにそう言った。

しかし、何か、何となく普通に俺の心の中が傷付くような事を言うな……

「じゃあ、見てみろ！！」

少し、苛立った俺は、彼女に背を向けて自らが運転する軽トラを停車させている場所まで歩いていく。

そして、そのまま歩いて軽トラが停車している場所まで辿り着いた時、彼女は絶望したような表情を俺に見せてこう言った。

「……そうですか、私は見捨てられたんですね」

えっ！？

「てか、助手席が乗れなかったら何処に乗るんだよ？」

普通、何処にも乗れないだろ？

いや、何処に乗せれば良いんだ……

「そんなの……」

な、何か嫌な予感がする……な。

俺はその嫌な予感を背に一歩彼女から引いて、彼女の解答待つ。

「そんなの……／／／／／」

そんなの光の膝の上に決まってるじゃないですかぁぁぁぁ！！／／／／／

ま、ま……マジで！？

彼女は頬を紅く染め、息を荒げて何か恥ずかしそうに俺を見ていた。

恥ずかしいなら、言わなきゃ良いのに……

「さ、流石に……あ、危ないだ「いや、大丈夫ですよ！！」……」

「だ〜か〜ら……」

「だから何ですか？」

『だから』と言ってその後に言葉を並べようと思った俺だったが、ふと視線を彼女に向けると彼女の目には涙が貯まって来ており……

……仕方ないか…

「分かった分かった……」

しかし、俺が許可を出した瞬間……彼女は下を俯いたかと思うと、

そのまますぐに顔を上げて点数をつけたなら１００点を軽く取れるような笑みを俺に送ってこう言う。

「それで良いんですよ（ニコッ）」

結局、また押し切られたな……

「阿求はわがままだなぁ～」

「光がマイペース過ぎるんです！！」

そう、彼女こそが俺の常連客第一号であり、俺に好意を向けている……九代目阿礼乙女で稗田家当主の稗田阿求である。

まあ、

マイペースなのは否定しないけど……この軽トラってそんなに面白いか？

今はそんなのはどうでも良いか？

これでも阿求は当主だから……自己主張が激しいのか？

の、ような疑問が以前に浮かんだことがあったようななかったような……気もする。

「じゃあ、行きますよ！！」

「わ～かったよ。」

の、ような疑問が以前に浮かんだことがあったようななかったような……

「じゃあ、行きますよ！！」

「わ～かったよ。」

結局、今日も押し切られた俺は軽トラに乗り込み……その次に阿求を膝の上に乗せる。

そして、シートベルトを閉め……「じゃあ、行くか……」

「出発進行！！　ですね。」

阿求の声と共に発進した。

「う～ん……

こうゆうこともたまにはいいですね！！」

「……そうか？

でも、あんまし動くなよ。運転に集中出来なくなって危なくなるから。」

「まあ…な。」

「グズグズしてると日が暮れちゃいますよ。」

「おお、そうだった。」

まあ、別に今考える必要がある物は見当たらないし……配達に行きますかぁ〜

俺は目の前に居る……いや、俺に乗って居る阿求に「あまり動くなよ。」と、とがめると目の前から流れてくる景色を見ながら俺は長いような欠伸を一度する。

余談だが、
途中、横の窓から空を見ると、それは見事な日本晴れで今まで半年間の苦労を忘れられる。そんな、濁りもなく綺麗に透き通っていて何処までも続いているような『青空』がそこにはあった。

「今日は天気がとても良いですね。」

「ああ、そうだな…」

阿求が俺の上に乗っていると言う恥ずかしいも気持ちも忘れるくらいに……

おや、客の機嫌が……（前書き）

これはあまり変わらなかった…

おや、客の機嫌が……

ある程度里の配達が終わったこの頃。
俺はとある里の重要人物の家にへと宅配物を配達に来ていた。

家の戸の前までにやってきた俺は、戸に手をかけ

ガラガラ！！

何故か勢い良く戸を開く。

「えっと、ごめんくださ～い！！」

シーン……

おっと、いつもならすぐに出てくるんだけどな。

俺は、玄関先でこの家の住人を待つが……
今日は配達先が多いこともあることもあり、とある考えが思い付く
……

荷物を玄関先に置いて行けば良いんじゃないか？

自分の考えの通りに荷物を玄関先に置いて、帰ろうとした所……

ゴゴゴゴゴゴ……

「？」

後ろからどす黒いオーラが……

前途多難？

「なあ、何で客の帰りを少しでも待とうとお前は思わないんだ？」

ああ、死亡フラグが……立った。

～～～～～～～

「もう一度聞く。何でお前は客の帰りを少しでも待とうとしないんだ？」

「えっと、その……まあ、そんな感じ？」

そういえば……今日は満月の次の日だったっけ？

ちなみに今俺は、どす黒いオーラに押されて家の中に追いやられてます。

恐い？

いや、それを超越してる……マジで。

「えっと、今日は予約が何十件も入ってて。
……夕方頃迄に借金滞納者にも配達しなきゃならないんですよねぇ……」

「そう、か……」

俺が勝ったの「でも、今回は客に対する態度がなってならんな。」

「へ？」

俺は、そのまま肩を掴まれ壁際に寄せられる……まさか！？

「そうゆうやつには教師として鉄槌をくださなければならんな。」

「いやあぁぁ！！」

叫び声がアレ気にしない、気にしない…

……

～～～～

「何だか光が戻って来ませんね……
一体、何をやっているのでしょうか？」

「いやあぁぁ！！」

あれは、光の叫び声……何かあったのでしょうか？

……でも、厄介事に巻き込まれるのは嫌ですね。

そっとしておきましょう。

触らぬ神に祟りなしですから……

～～～～

「た、ただいま～……」

「何だか顔がやつれてませんか？」

「気のせいだ、気のせい。」

「それなら……良いのですが……」

いや、本当は散々な目にあったんだけどね……

変な心配をかけたくはないしな……

「じゃあ、助手席が空いたから……そっちに移動してくれないか？」

「……す／／」

「何？」

何だ……よく聞こえないぞ？
更に顔が真っ赤だし。

「い、い、い……」

い？

「嫌ですっ！！／／／」

何だと！？

何故、そうなる！？

「えっと、何故そうなる？」

「だって……私の身長が小さいおかげで……
外が見えにくい……
から。／／」

……はあ、どうしようか？

阿求は顔を真っ赤にしながら言ってくるし……
恥ずかしいなら言わなきゃ良いのにな。

分かった分かった。
しょうがないし拉致があかなそうだから……
だから……
だからぁ！！
「分かった。分かったから……乗って良いぞ。」
了承してやった……

運送業者としての苦悩？（前書き）

修正版を久しぶりに作りました。

運送業者としての苦悩？

「……ふう」

「はあ……」

俺と阿求は今「やっぱり長いですね……この階段。」

「ああ、それには俺も同意する。」

あの有名な滞納者の所に酒と『請求書』を届けている。
それにしてもやっぱし階段が長いな……角度も急だし。

これじゃあ、無理して参拝しに来ようとも思わない理由が分かる気がする。

……しかし、思うのは毎回毎回の話だが。

～～～～～運送業社の苦悩……～～～～～～～～～

「宅配便で～す！！」

……

……

うん、おそらく、完全にシカトだな。

ならば、どうすれば良いのか？

こうゆう時は……これ、

チャリン

賽銭一択だ！！！

……

……

あれ？

留守か？

『普通なら賽銭が入ったら……目を輝かせて出てくるんはずだからな。』

『まさか、居留守な訳ないよな？』

と、俺はすぐさまに考えを広げていく……が。

バシッ！！

「痛っ！！」

後頭部を誰に何かで殴られた。

まあ、軽くだから叩かれたに近いだろうけどな。

「んな事を考えてるんだったら……ちょっとはお前も手伝うんだぜ……」

「ああ、魔理沙か。
　てか、じゃあ魔理沙は何に手伝ってるんだ？」
てか、何がお前に分かる？

「霊夢の看病なんだ……ぜ？」

「どうしてそこでクエスチョンマークが付くんだよ……」

「まあ、そんなことはどうでもいいからこっちに来い。」

何故かは分からないが、俺は問答無用で魔理沙にズルズルと引きずられていく……

「阿求～……」

そんな俺は、弱々しく阿求に助けを求めるが……

「ちょっと、待ってくださいよ！！」

俺が思った事をよく分かっていなかったようだ。

あまりに予想外な事ばかりが起きるので、俺は思わず苦笑いを顔に浮かべる。

てか、今日はいろいろと……散々だな！！
ホントに！！

～～～～

「霊夢～　客なんだぜ。」

「……何、魔理沙。今、私は大変なんだけど……」

「宅配便で～す。」

「ゲッ！！」

「霊夢？　どうしたんだぜ！？」

よし、予想の通り。
…でも、顔色と表情を見れば……具合が悪いのは一目瞭然だなぁ
……これは。

「ま、ま、魔理沙ぁぁぁぁ！！　アンタ、アンタっていうのは…
…私がこんな状態が悪い時になんって事をしてくれるのぉぉぉ！！」
叫んでいる本人は基本的に無視をするが、俺はあの叩かれた後に何
往復もして運んだ宅配物を並べていく。

「はい、注文した酒。　ビール１０ケースに日本酒。　これだけだ
ろ？」

「へ？」

「何だ？　まだ何かあったのか？」

「い、いや……

追加で金を取り立てに来たのかと思ってたんだけど……」

「何なら取ってやっても良いぞ？」

「……」

言い返す気力もない……か。

これは本当に具合が悪そうだな……仕方ない。

借りは作っておけば役に立つ時があるだろうから、仕方ない。

「ホレ！　受け取れ！！」

ビュ！！

俺はそう言うとバックからある物を取り出して霊夢に投げる。

パシ

「な、何よこれ？」

「チョコレートだ。

甘いから良いエネルギー補給になるぞ。」

追加で例のアレをはっつけてあるがな。

「ちょ、これアンタ……」
「な～に気にする事はないさ。
俺はこれから今日、最後の配達先に行かなきゃならないからじゃあな！！」
俺は、そう言葉を残して神社から出て行った。
「あ、ちょっと……待ってくださいよ～！！」
あ、そういやぁ…阿求を忘れてたな。

～～～～
「さっきは霊夢に何を渡したんですか？」
「気になるか？」
「はい。」
……ここは、一発冗談でもかましてみるか。
「ラブレターだよ。」
「え？」

「いや、うそだ」

「……」

わっははと、笑い飛ばす俺だが……

「ホント、ですよね？」

何故か阿求は、何処か不安げな顔をしていた。

何故？

「ああ、そんなことを嘘ついて何の得になる？」

「です…よね。」

しっかし…何か阿求の表情が暗くて寂しそうだな。

と、思った俺は……

「誤解を招くことを言って、ゴメンな。」

「あ、っえ……／／」

詫びの言葉に添えて、お姫様抱っこというものをしてやった。

～～～～～～

「何だ、何だ……
って、霊夢……あいつらイチャイチャやってやがるぜ！！」

「……近くで大声を出さないでくれる…頭が痛いから。」

「悪い、悪い……
でも、イチャイチャやってやがるんだぜ！！」
「！？
ホントね……でも、私には何にも関係ないから別に良いわ。それに、弱みにもなるだろうから……ブツブツ」

「おい、私を一人にしないでくれ！！」

な、会話が…二人が出た後の神社であったらしい。

本日休業日？

最初に言っておく。

店には必ず言っても良いと思うが、当たり前のように休業日がある。

特に個人経営な状態の業態ならばこれは完全当て嵌まるだろう。

こんな事を言っている俺だが、それには訳がある。

そんな訳というモノを答えは簡単だが予想してみてほしい。

簡単に分かる答えなんだがな。

俺も本日は輸送機（軽トラ）の点検の為に……『休業』だからだ。

そう、それだけ………

本当にそれだけだ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ふう………」

突然だが、今現在俺は、車（軽トラ）の点検をしている。

何故、そんなに突然なのかだって？

それは、約半年くらいに一回のペースで軽トラの点検をしているからさ。

壊れられたら代用品の営業車はないし、さらに今は初夏………『これからの季節にエアコンとかが壊れられたら………』とか、考えると恐ろしくてね。

まあ、そんな訳で不定期に店の休業日を決めて点検をしている訳だ。不定期だから……サボっている訳じゃないから別に大丈夫？だろ。

カチッカチッ

よし、タイヤを固定するボルトもちゃんと締まってるな………

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ＡＭ　１１：３０

ようやく、軽トラの点検が終わった。

俺は首を一回程回して一息つく。さて、昼飯でも食べるかな？

と、思って倉庫から歩き出したがしかし、その時だった……

「すみません！！」

『ちょっ、マジで……幻想郷に居たのかよ！？』

「荷物を届けて欲しいのですが……」

そこでだ、銀髪のメイドにあったのは……

～～～～

「あ、さっき点検が丁度終わったんで……

汚れたこの服を着替えるのでそこで待っててくれませんか？」

「あ、はい。」

とりあえず、汚れたこの服では接客も出来ないので……悪いが待っててもらうことにしよう。

〜〜〜〜〜

「はい、お待たせしましたー」

「あ、別に大丈夫ですよ。」

「で、今日の依頼される荷物と場所をお聞きしてよろしいですか？」
「荷物はここに置いてある物で、場所は紅魔館でよろしくお願いしますわ。」

『……は？』

てか、この荷物の量をこの人はどうやって運び込んだんだ？

「私の能力の一部と考えてくだされば。」

はは、心を読まれるとは……

「で、配送先ですが……「貴方がわからない？」はい、そうですね。」

紅魔館……か。
噂でもそのような洋館など聞いたことがないな。

何故分かったと言われてもさ…
メイドがいるなら洋館って普通予想がつくだろ。

「大丈夫、私も乗って行きますわ。」

てか、何か……完全に運送業者を便利屋扱いしてやがる。

何か、腹が若干立ってきたから…かまをかけるように何か言ってやろうか？

「何か？（ニコッ）」

「いや、何でも。」

はあ……しょうがない客は客。

さらに初対面だから評判の為にこれくらいだったら我慢に我慢を重ねろ。

ぐっと堪えた俺は立ち上がると……

「さて、暗くなる前に行きましょうか？」

「そうですわね。」

とりあえず、軽トラを駐車している場所へ行くように促した。

…早くも、『この人と喋ってると精神力が削られる……』と思い、
気がついてしまった俺。
今回はちょっと道のりが長そうなのに……大丈夫か？

『大丈夫だ、問題ない』とは笑い事でも言えない……
言えない俺がいる。

だから、本日は休業日……

「さて、まず最初にシートベルトという安全装置がそこにあるので……これをこうゆう風につけてください」

「こうですか？」

「はい、そうですね」

さて、向かうとしますか。
途中に絶対、問い詰められるな……まあ、良いか。

～～～～～～～～

「はい、ここです。」

「……ずいぶんと大きな屋敷ですね。」

俺はあのあと、いろいろと車内で質問攻めに合い、こってりと搾られていた……変な意味じゃないよ？
まあ、事故やハプニングが全くなかったのが不幸中の幸いだが。

「で、この荷物は何処に運べば良いんですか？」

「ちょっと待っててくださいね。」

と、咲夜さんは言い残して門の前まで歩いていく。
門番に許可でも取るのだろうか？

……しかし、俺の考えは遥かに外れ……
とんで～もなく、俺は度肝を抜かされることになる。

俺が門の方に視線を向けると、そこにはチャイナドレスを着た女性が居た。

うん、流石こうゆう所の門番。無駄に微動だにしない。

しかし、咲夜さんは怪しい笑みを浮かべながらその女性に近づいていく。
正直、やられたら震え上がって動けなくなりそうだ……

そして、そのまま口を開いた。

「は～い……
起きてくださ～い。」

は！？

あんなに普通な感じに目を見開いて寝れる奴がいるのか！？

と、上を向いて考えていた俺は……ずらした視線を急いで再び門に向ける。

すると……

「あんギャァァァ！！」

とんでもない悲鳴が聞こえた……

うん、俺は何も見てないし聞いてないさ。

うん、悲鳴なんて聞いてないし……血の激流？なんてみてないさ。

うん、オデコの部分にナ「お待たせしました。」

「あ、ああ……

あの人は大丈夫なのか？」

「妖怪だから大丈夫です。」

それは、違うと思う……

と俺は、いろいろと思ったことがあったりしたが……言ってしまうとこの世にいられなそうな気がしたので、それを全部心の中で飲み込んだ

うん、流石腹黒メイド……コワイね。

「誰が腹黒ですって？」

え？

「冗談ですよ。　ついて来てください。」

いや、流石にタイミングが良すぎて冗談に聞こえなかったぞ。

本当に声には出してないのにな……

～～～～～

「ここに置いてもらえれば……」

「はい、わかりました。　」

あの後、館の中の食糧庫に案内をされて今に至る。

「あ、速めに終わらせるんで待っててください。」

終わったらいろいろと渡す物もあるしな……

～少年、作業中……～

「はあはあはあ……

待たせてすみませんね。」

「別に私は大丈夫で！？」

「？」

「ちょっと……待っててくれませんか？」

何故か突然咲夜さんが慌ただしくなった……な。

何かあったのか？

「別に大丈夫ですよ。
自分のことは気にしないでください。」

「ありがとう。」

そう言うと、咲夜さんはその場から消えた…

『能力か？』

まあ、そうだろうな。

『転移系？』

そしたらさっきの門番は何だった？
投げる動作も無く突然ナイフが刺さってたぞ。

何か違う。

『じゃあ、空間系？』

てか、空間系ってどんなのだ？

「う～ん……」

俺は、咲夜さんの能力が何なのか凄く気になってるようだな。

いや、なってますけど……ね。

～～～～～～～

とある部屋にて……

「お嬢様、本気ですか？」

「ええ、本気よ。」

「じゃあ、なんで……」

「面白いからよ。」

「へ？」

「だから、彼が自体が面白いからよ。」

……

……さっきから２０分くらいか？
咲夜さんはまだ戻って来ない。
何か重大な事でもあったのか……？

と、
俺はこれから降り注ぐ『災難？』いや、出来事にも気が付かずに感じなく…
今日出会った人のことを暢気にも心配していた。

そう、暢気にもね……

〜〜〜

「ああ、咲夜さんは……
まだ、戻って来ないのか……」

あれから約一時間くらいが経過したけれども……
咲夜さんはあれきり戻って来ていない。
やはり一大事な事でもあったのだろうか？

……あと、立ちっぱなしで疲れてきたなんて言うのは余談だ。

てか、本当に大丈「お、お待たせしました！！」

「のあぁ！！」

うわ、び、ビックリした……

アンタの能力が何かは知らないけどさ……
それがあれば暗殺とかやり放題だね、ホントに。

「随分とお待たせしてしまいました……」

「いや、これ以上長い時もあったから……　大丈夫さ。」

あの、例の滞納者の時だよ……でも、あれより前のことだけどな！！

あの時は最終的にお札が飛んで来たり、スペカが発動したりと、殺されそうになったりして……散々だったな。

「あ、あの……よろしいでしょうか？」

「あ、ああ。　悪いな。」

てか、咲夜さんの口調がまた変わってますよ……いわゆる『仕事モード』ですか？

まあ、俺にも仕事中はこうだからそうだろうけどな……比べるな？

いや、それは人の好き勝手でしょ。

「お嬢様、客をお連れしました。」

「へ？」

えっと、さっきまで食糧庫の前に居たはずだよな？

じゃあ、今なんで俺は「お嬢様？」

……あれ？

どうした？

「ちょっと、お待ちください……」

そう言って咲夜さんは部屋の中に入って行った……のだが！！

「お嬢様！！　人に客の案内を頼んでおいて……お嬢様は一体、何をやってるんですか！？」

「だって……」

……

「だってじゃないです！！　お嬢様はこの家の当主なんですから少しは自覚を……」

「咲夜？　鼻からアレが出てるわよ……」

「あ、すみません。」

一体なんなんだ？　この家は……

いや、この屋敷は……

～～～～～

「では、中にお入りください。」

「ああ、どうも。」

お嬢様……ね。

俺は、あの時の待ち時間からようやく部屋の中に案内され……

まあ、一安心したと言う事。

てか、お嬢様＝当主で良いんだよな？

さっき咲夜さんが言っていたし。

俺が部屋の奥に進むとそこには……

「ようこそ、紅魔館へ。」

と、言う…後ろに黒い羽が付いた少女が居た……

う〜ん……

コウモリのような羽に鋭い犬歯……

あれは間違いなく……俗に言う『吸血鬼』だなぁ。

俺、幻想郷に来てから初めて見たよ『吸血鬼』。

「はじめまして。　自分は人里で運送業を経営している上松　光と申します。」

ここは、ちゃんと礼儀良くしておこう。

「あら、礼儀が良いわね。　私を初見の人は良くナメてかかって来るんだけど……」

確かに、こっちに来たばかりな人やこっちの非常識的な常識を知らない人々は……彼女を見れば、最初のうちはナメてかかるだろう。

『最初』だけはな。

『吸血鬼』自体の能力はかなり常識的にも高い事はご存知だろうが……

その中でも彼女はひとつの名家の当主。

そこら辺の奴らとは格が違う。

…多分。

「では、貴女のお名前を教えてもらえないでしょうか？」

「ふ、良く分かっているみたいね……
良いわ、私の名前はレミリア・スカーレット。
種族は「吸血鬼ですよね？」……そうよ。」

そして、ここ（幻想郷）では一般的な『常識』など通用はしない。

……つまり、妖怪などを筆頭とする人外種族は、容姿と年齢が結び付かないのだ。
そう、彼女のように。

（彼女が何百年生きているなど知るよしもないが……）

今、何故突っ込んだのかは気分的な物なので、特に理由はない。
それこそ礼儀とかがヤバい？
大丈夫、大丈夫。
そんなことで突っ掛かるような程気は短くないだろうから。

「では、レミリアさん。　貴女は何故自分のような物をここへ呼んだのですか？」

とりあえずここで人外と関わって生活し、生き残りたいのなら、初対面なら自分を下に下に下げて対応する。

これがまず必要となるだろう。

この世界に『ヒト』のプライドなど気にしている暇などないのだ。
ただし、一部を除くが……

だから、さっきはちょっとやってみたかっただけだって！！

「う～んと……
貴方を見た時に興味を持ったから……だわね。」

いや、今の詰まり方は何か違う。

もしかして、彼女は俺の何かを知っているのか？

もしや、彼女は俺の能力を知っている？

俺の能力は誰にも公表していない。
だから、本当は『誰も』知らないはずなのだ。
ホントの能力の名は誰も知らない。何かカッコイイだろ？

「そんなに警戒しなくて良いわ。
私は貴方について何も知らないし……」

「？」

「貴方を取って喰おうとも思ってないもの。」
そりゃあ、それは貴女の対応を見ればわかります。
もし貴女が俺を喰おうと思って呼び出したのなら、貴女のような妖怪の類なら誰でも変な違和感が漂いだすからな……

まあ、『ヒト』の中にある警報が鳴り響くと言った方が良いか？

「はは、それは喜ばしいですね。」

とりあえず、俺は今回、彼女と笑って話す事にしよう。

うん、そうしよう。

……いや、何だか気持ち悪がられるかもしれないから…やっぱしやめるか。

じゃあ、どうする？

「？」

「何でもないですよ。」

やっぱし、仕事モードで良いや、疲れるし。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6489x/

幻想の運び屋 改訂Ver

2011年11月5日08時12分発行